

【研究資料】

生徒の生きる力を育む学校内子ども食堂

前川美紀子, 宮里 嘉昌, 宮里 辰宏

In-school children's cafeteria that foster students' ability to live

MAEKAWA Mikiko, MIYAZATO Yoshimasa, MIYAZATO Tatsuhiro

要旨

2019年9月に名護市立A中学校でスタートした学校内家庭科実習室での子ども食堂は、数名のボランティアで運営している。当時の学校長方針で沖縄県内初の学校家庭科実習室での子ども食堂がスタートした。実施している中で食を通した多くの効果がみられた。これらの子ども食堂効果は、生徒の「気づき」から「学習」「行動」の一連の流れの中で生徒の「生きる力」を育むことに繋がると考える。

キーワード：食育, 朝ごはん, 学校内家庭科実習室, 気づき, 行動, 生きる力

I. はじめに

子ども食堂とは、「地域住民や自治体が主体となり、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するコミュニティの場」で、その目的は、共食が難しい子どもに共食の場を確保し、また地域コミュニティの中で、子どもが安心して過ごせる場所を提供することと述べている。子ども食堂継続に要する資源として課題として、(食育総合研究所) 場所、資金、食材、ボランティアの確保をあげている。場所によっては、子どもだけでなく、大人も利用できる所も多くある。

2020年10月現在、沖縄県の居場所(子ども食堂)の登録(2020)は、210か所あり、那覇市が41か所で最も多く、名護市の登録は3か所であり、名護市で登録されている“aube屋部の浦食堂”は、A中学校学校内子ども食堂運営に参加している。

子ども食堂運営は、開店曜日、時間帯、運営主体は個人から自治体、NPO法人、運営場所は、公民館、児童館、飲食店、空き店舗など様々である。運営に要する費用は、主に公的補助、民間企業の助成金、寄付などで賄われている。

食材の調達方法は、近隣のスーパーでの購入や寄付、商品にならない物の譲り受け、農業協同組合からの提供、農家からの提供などがある。

子ども食堂は、2010年代頃よりマスメディアで多く報じられたことで全国に急増しているが、子ども食堂=貧困対策のイメージが強く、貧困を前面に出すのではなく、

誰でも利用できる場所としての周知が行われている現状にある。

筆者は平成19年より、食育活動を通して、幼稚園児・児童・生徒や保護者、地域住民に「早ね・早起き・朝ごはん」の劇を通して、朝ご飯摂取と生活リズムを整えることの重要性を伝えている。これまでの研究より、「食を中心とした生活リズムを整えること」、つまり、「生活過程を整える」ことが「食育」と捉えている。食育劇を通した食育実践活動での観劇後の幼稚園児や児童からの感想文は、自己の振り返りが最も多く、生活習慣を整え、自分の健康は自分で守る気づきが得られている。前川(2008, 2013)「気づき」は「あるべき自分」「ありたい自分」へのスタートになる。何故なら、「気づき」により、自分の現在の生活習慣を点検し、改革する必要性を認めることが出来たとき、「学習」「行動」の次の段階へのステップが始まるからである。野崎(1998)。子ども食堂は、食の大切や食の楽しさ、食を通してのコミュニケーションが図られ、気づきが得られ健康な行動変容にも繋がる場であり、人間関係構築の場にもなると考える。

II. 子ども食堂開店までの経過と子ども食堂の様子

図1に示すように、沖縄県名護市立A中学校では、2018年9月から、学校の家庭科実習室を活用した子ども食堂を長期休暇除く、毎週2回、火曜日と木曜日に開店している。利用生徒は、子ども食堂の食券を100円で購

入し朝食を摂取する。食券はボランティアスタッフが準備し、食券販売は近隣のコンビニエンスストアへ協力依頼している。当日食券のない生徒は、100円を支払い朝食摂取が出来る。子ども食堂は保護者や地域の方教職員等、誰でも利用可である。利用生徒は、部活の朝練後や友達と一緒に朝食を摂りたい等の目的で来店する。準備前に来店の生徒には、座席の準備や飲水の準備を依頼している。また、調理に興味のある生徒へは指導しながら、実際に調理をしてもらっている。開店時間帯は7時20分から7時50分迄で、朝食摂取後生徒は教室へと向かう。子ども食堂の平均利用者は30余名である。

子ども食堂開店のきっかけは、当時の学校長宮里嘉昌先生の「朝食を食べていない生徒がいる。子ども達は学外では様々な事情があるが、学校内に入ったらみんな幸せになってほしい。信頼関係を繋ぐ食堂にしたい」との考えのもとで、沖縄県内初の学校内での子ども食堂がスタートした(図1)。宮里先生は、食の大切さから、全生徒の朝食欠食状況把握や十分な食が得られていない生徒の把握を行い、スクールソーシャルワーカーと連携を取りながら行動を起こしたようだ。

A中学校の子ども食堂は、A中学校保護者兼NPO法人代表の宮里辰宏さんが、コーディネータで中心的な役割を担い、数人のボランティアで運営している。開店までの経過は図1に示した通りであるが、運営資金獲得や保健所との調整等に関しては、NPO法人として子どもの居場所づくりで活動しているコーディネータが中心的な役割を担っている。開店当初のボランティアはスクールソーシャルワーカーや保護者、民生委員、大学生、高校生(A中学校卒業生)が主なメンバーである。学校サイ

ドは、家庭科実習室の無償提供行っているが、子ども食堂へ直接的な介入は行っていない。しかし、気になる生徒へ子ども食堂利用の促しを行ったり、子ども食堂の様子を窓越しに観察したり、利用生徒へ声掛けを行っている場面も多々見られる。また、生徒と一緒に朝食を摂りながらコミュニケーションを取っている教員もある。学校長や養護教諭は、子ども食堂開店時には、子ども食堂の様子観察を行っている。

1. 子ども食堂活動内容

筆者は、地域学校協働活動推進員の紹介で、開店初日からボランティアとして運営に関わりながら、当日メニュー食材の栄養素(赤・黄・緑)について生徒へ示し朝ごはん摂取の重要性も伝えている。メニューの記載は利用生徒に行わせている。また、表情の優れない生徒や気になる生徒へ声掛けを行いながら食の大事さを個別に伝えている(写真1~3)。

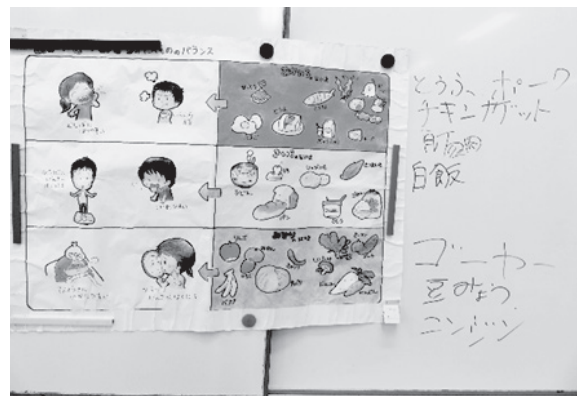


写真1 生徒が板書したメニュー食材

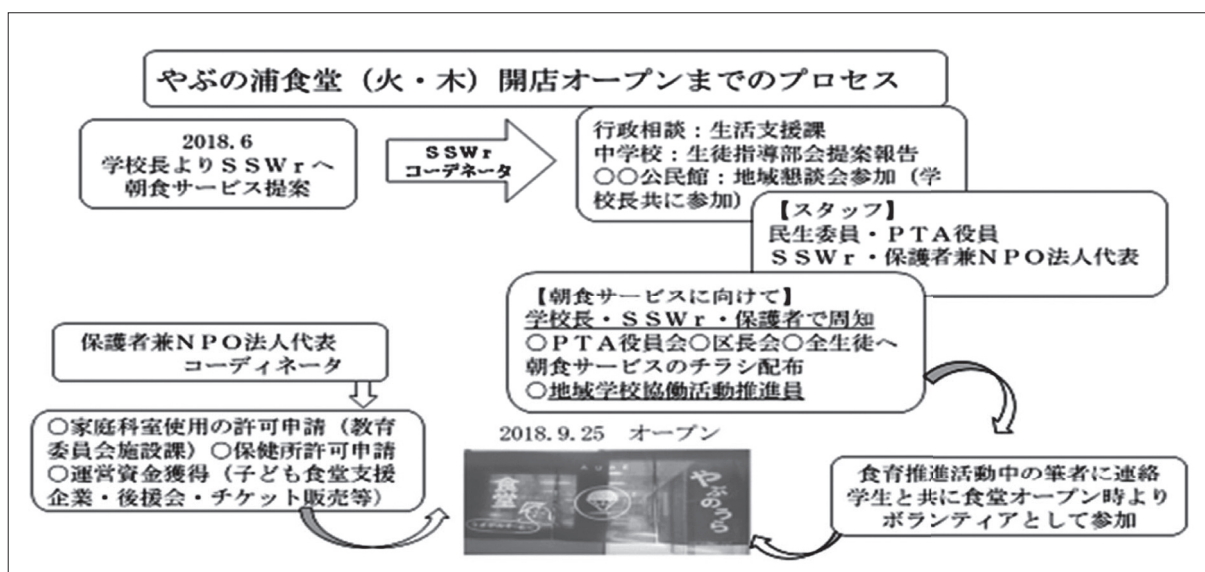


図1 子ども食堂開店までの経過



写真2 朝食準備を手伝う子ども食堂利用生徒



写真3 子ども食堂の様子

2. コロナ禍での活動

2020年度の子ども食堂の開店は、コロナ禍の影響で6月、7月、9月、11月、12月であった。開店にあたっては、図2～3の掲示物で、感染予防を徹底して行った。この間の平均利用者は25名で、1年生12.9名、2年生12.1名、3年生の利用はほとんど見られなかった。

子ども食堂へようこそ！

3つの密（密閉・密集・密接）を避け、新型コロナウイルスの感染拡大防止を实践しながら、子ども食堂を開店します！

ご協力をお願いします！

1. 熱や咳など体調が悪い場合の利用は控えてください。
2. 子ども食堂へ入室時は、入口に設置している消毒液で、消毒をしましょう。
3. 席は一つの椅子分開けて腰かけましょう。
4. 座席は横並びで腰かけましょう。
5. 出来るだけ、子ども食堂にいる時間を短くし食事終了後は速やかに退室しましょう。

令和2年6月9日
子ども食堂実行委員会

図2 子ども食堂へようこそ

R26.8

ボランティアスタッフの留意事項

★3つの密（密閉・密集・密接）を避け、新型コロナウイルスの感染拡大防止を实践しながら、子ども食堂を開店します！

🍷 スタッフの皆様に関すること

1. 検温を行い、体調管理をしっかり行う。
2. 入室時は、マスク装着、手指衛生をお願いします。
3. 部屋のドアを開け換気を行います。
4. 最後に使用した部屋のテーブル・椅子を消毒します。

👶 子供たちへの注意喚起

1. 子ども食堂へ入室時は、入口に設置している消毒液で、消毒をしましょう。
2. 席は一つの椅子分あけて腰掛けましょう。
3. 座席は横並びで腰かけましょう。
4. 出来るだけ、子ども食堂にいる時間を短くし食事終了後は速やかに退室しましょう。

図3 コロナ禍における子ども食堂運営の留意事項



写真4 体調管理確認・手指消毒・3密を避けて

III. 研究目的

子ども食堂実施評価を行い課題の検討を行う。また、子ども食堂を利用することによる生徒の変化について分析する。

IV. 研究方法

Google homes GRLコードを作成し、アンケート調査を実施した。校長も結果の把握が出来るようにした。

1. 研究対象

沖縄県名護市A中学校 1年生・2年生170名, 1年生:
87名・2年生:83名

2. 調査時期

2021年3月

3. 調査内容

- ① 子ども食堂が始まったきっかけについて
- ② 子ども食堂の利用の有無と利用回数
- ③ 子ども食堂利用の“きっかけ”
- ④ 子ども食堂を利用することで自己の変化
- ⑤ 子ども食堂の利用理由
- ⑥ 子ども食堂に友達を誘いたいのか
- ⑦ 子ども食堂を利用していない理由
- ⑧ 今後の子ども食堂利用について

4. 倫理的配慮

アンケート用紙には、個人が特定されないことや今後の子ども食堂の運営に役立てる目的であることを明記した。

5. 分析方法

記述分析では、数理システム社のText Mining Studio6.4を利用して、ことばネットワーク分析で2回以上出現した共起ルールを抽出した。

V. 結果

回収率 100%

1. 屋部の浦食堂が始まったきっかけ

生徒の自由記述は「何らかの事情で食べることが出来ない人への朝ごはんの提供」「栄養バランスの食事」など子ども食堂を始めた意図が伝わっている結果が得られた。

2. これまでの子ども食堂利用について

全体の52%が子ども食堂を利用したことがある。また、2年生においては、60%以上の生徒が利用していたことが分かった。利用していない生徒の上位回答理由は、「朝寝坊」、「利用する生徒が多すぎる」、「家でご飯を食べている」であった。

表1 これまでの子ども食堂利用

	1年生	n	2年生	n	全体	n	%
はい	37		52		89		52%
いいえ	50		31		81		48%
合計	87		83		170		100%

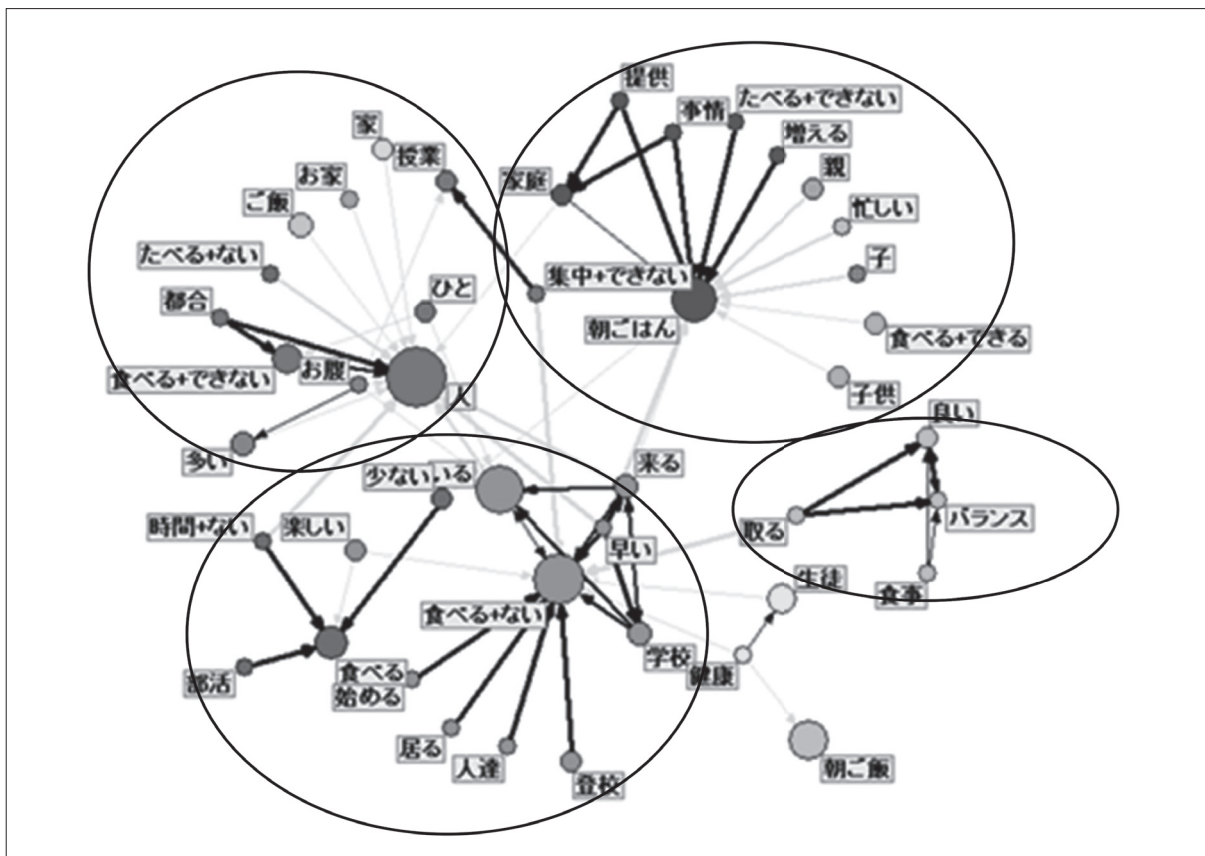


図4 ことばネットワーク (始まったきっかけ)

3. 子ども食堂の利用きっかけ

表2は生徒の子ども食堂利用のきっかけを示したものである。最も多いのが友人に誘われ63%、次に多いのが自分で行きたいと思ってが30%であった。

子ども食堂の利用のきっかけは、友達から誘われたり、友達を誘ったり、自分から行きたいと思ったりと生

徒の自発的な行動が子ども食堂利用に繋がっている場合が多くみられる。教員や親の勧めが子ども食堂に利用に繋がった生徒もあった。

4. 利用回数と利用生徒の変化

利用回数は、表3の通り10回以上利用の生徒は1・2年生合わせると107名(55%)見られた。

表2 子ども食堂利用のきっかけ(複数回答)

	1年生	n	2年生	n	全体	n	%
友人に誘われて		31		46		77	63%
自分で行きたいと思って		17		20		37	30%
親に行くように言われて		1		1		2	2%
先生から勧められて		1		4		5	4%
ご飯がない				1		1	1%
合計		50		72		122	100%

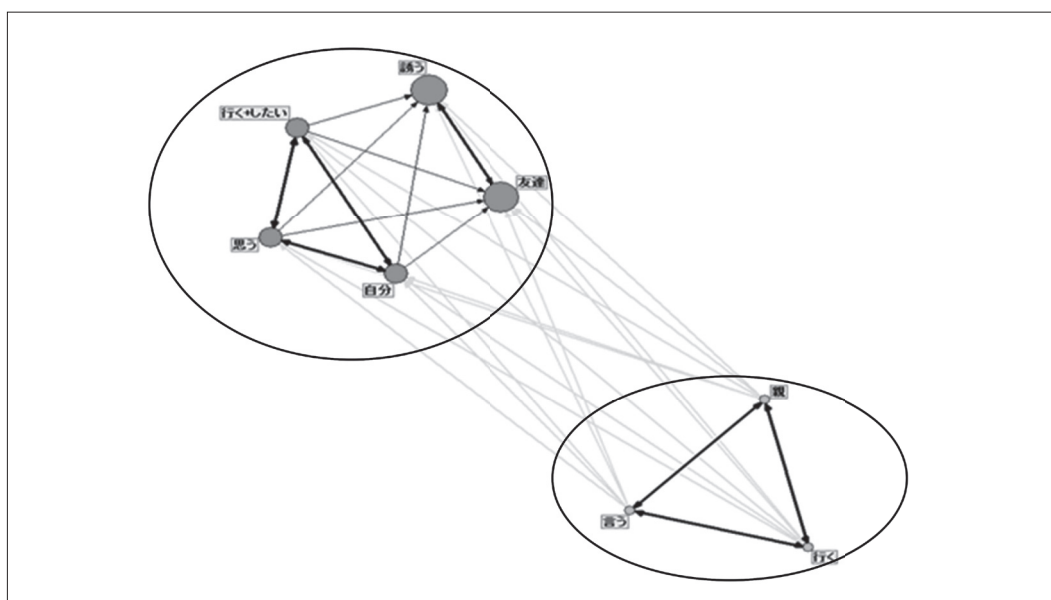


図5 ことばネットワーク(利用のきっかけ)

表3 子ども食堂利用回数と利用生徒の変化(複数回答)

	～5回		～10回		～10回以上		合計 n
	1年生 n	2年生 n	1年生 n	2年生 n	1年生 n	2年生 n	
早く起きるようになった	12	11	7	7	10	11	58
早く寝るようになった	2			4	5	5	16
朝ごはんを食べるようになった	3	6		2	6	7	24
給食までお腹がすかなくなった	4	2	2	2	5	12	27
栄養に興味がでてきた					3	3	6
調理に興味がでてきた	2	2	2	2	4	3	15
お家でも料理をするようになった			1		1	2	4
友達が増えた					1	4	5
ご飯を食べるのが楽しくなった	2	2	1	1	6	7	19
学校を休まなくなった	1	3			1	2	7
学校が楽しくなった	1	1		2	4	5	13
合計	27	27	13	20	46	61	194

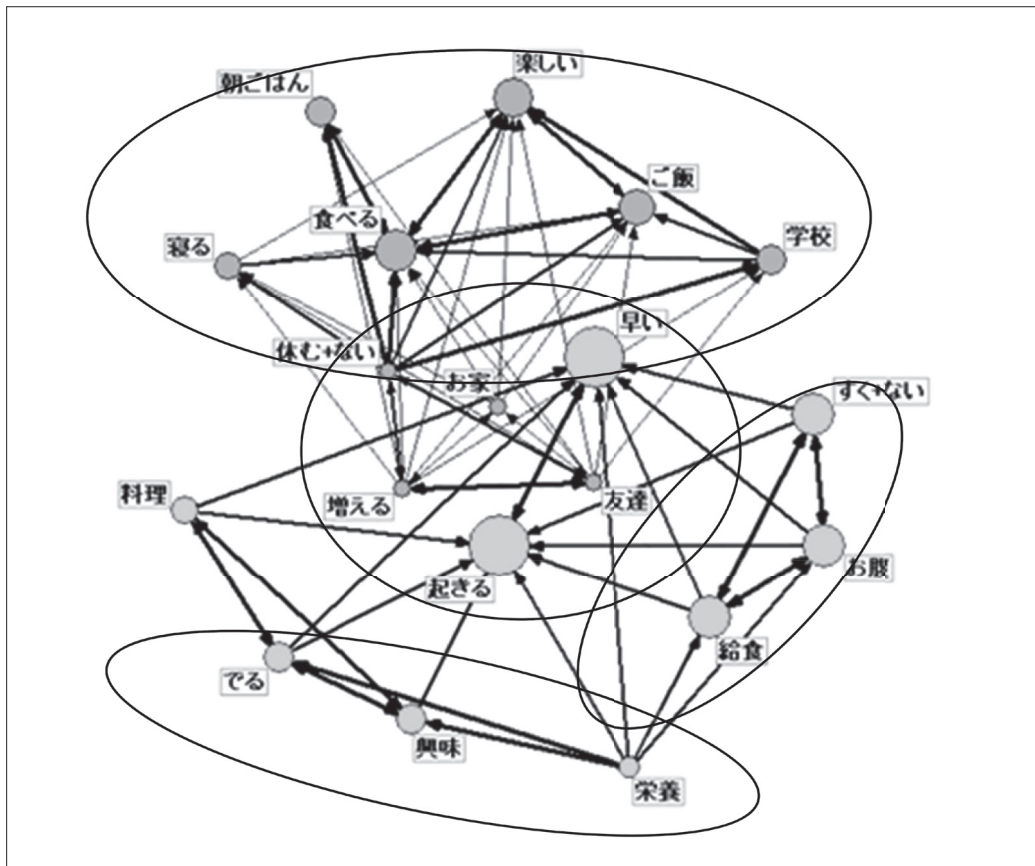


図6 ことばネットワーク分析（子ども食堂利用による生徒の変化）

ことばネットワーク分析（図6）より、子ども食堂へ行く目的で、早起きをするようになる、ご飯を食べることが楽しみになり学校を休まないようになっている。

子ども食堂が要因となり、利用生徒の生活習慣を整えていくタイム・マネジメントに繋がっていると考える。

更に、料理に興味が出ていることは食の自立にもつながる。また、給食までお腹が空かなくなったということを感じることによって、日頃の朝ごはんの重要性が認識されていくと考える。学校が楽しくなった生徒は、子ども食堂を通して、コミュニケーションの幅が広がったのではないかと考える。

5. 子ども食堂に友達を誘いたいですか。

表4 子ども食堂に友達を誘いたいですか

	n	%
はい	85	91.4%
いいえ	8	8.6%
合計	94	100%

子ども食堂を利用したことのある生徒に、子ども食堂に友達を誘いたいと質問したところ91.4%の生徒が誘いたいと回答している。

6. 子ども食堂を継続してほしいですか

表5 子ども食堂を継続してほしいですか

	1年生	n	2年生	n	全体	n	%
はい		86		81		167	98%
いいえ		1		2		3	2%
合計		87		83		170	100%

全体の98%の生徒が子ども食堂継続に賛成である。

7. 継続してほしい理由

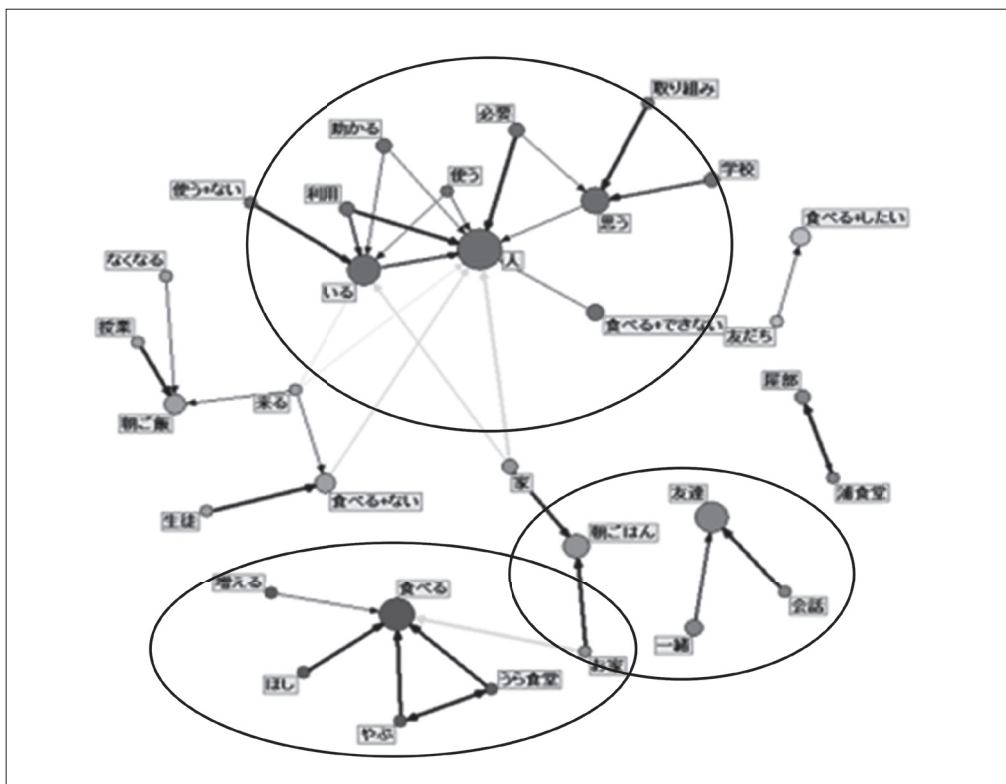


図7 ことばネットワーク分析（継続してほしい理由）

ことばネットワーク分析からは、「食べる」ことや「食べる人」「友達」の存在を強く意識していることが分かる。自由記述に多く出ていた内容からは、「一緒に食べると楽しい」、「美味しい」、「友達とご飯が食べられる」、「友達とご飯を食べたい」、「全員が朝ご飯を食べられるようにするため」、「先輩と一緒にごはんが食べられる」など、食の基本である“楽しく食べる”ことが、共食で得られていることが分かった。また、「朝ご飯を食べられない人の味方になってほしい」「とても助けてもらっている」「朝ご飯を食べられてない人がまだまだいると思うから」「利用する予定はないが、朝ご飯を食べないと倒れる人もいると思うから」等などの意見もあった。

いいえの生徒の理由は、「利用する機会がない」「屋敷の浦食堂に頼って家のご飯を食べないことはあまり良くないと思うから」であった。

VI. まとめ

今回のアンケート調査より、子ども食堂を利用している生徒も利用していない生徒も、A中学校で展開している子ども食堂に肯定的な意見であった。「必要としている生徒がいる」と捉えていることは、他者への思いやり

が汲み取れる。また、「友達と食べたい」「利用するかもしれない」など他者とのかかわりを求めていることも分かった。更に、利用回数が増えている生徒は、子ども食堂利用を通して計画性や社会性、自立性も育てられていることが考えられる。

1. 子ども食堂運営とボランティア

子ども食堂を支えているボランティアは、保護者であったり、地域のおじいさん、おばあさん、おじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんであったり様々である。子ども食堂は、“ゆんたく”しながらのライフスキル伝授の場でもあり、ボランティア個々のカラーで生徒に関わることが、生徒にとって生きるジブン（知恵）を育むことに繋がっていくと考える。時には教育実習生も、子ども食堂で、朝食を摂りながらコミュニケーションを図っている。利用生徒は、教育実習生と子ども食堂で会えることで、子ども食堂利用機会に繋がる。また、教育実習生にとっては、授業では見られない生徒の様子を知ることにつながる機会となる。

子ども食堂の利用生徒を通して保護者へ繋がり、保護者が子ども食堂への関心を示しボランティアスタッフとして関わった期間もあった。利用生徒から家庭へ繋がった事例である。今後もこの様な繋がりが出来るような工

夫が必要である。

子ども食堂のボランティアは、利用生徒の前回利用時と表情が異なる、暫く利用しない、いつもの仲間から外れている等いつもと違う“気づき”があった場合は、より注視した見守りを行っている。利用生徒の個人情報を学校側から得ることはないが、ボランティアは、気になる生徒への関りで得た情報を学校長、養護教諭と情報共有することもある。学校側が情報を得ることで、生徒の学校生活環境を整える事にも繋がると考えるからである。

今後の子ども食堂継続についての問いでは、「安心して利用できる場所である」「地域の方とコミュニケーションが取れるから」の回答があり、A中学校の学内子ども食堂の展開は、ボランティアも含め地域と学校が連携・協働する足掛かりになると考える。

2. 地域の農家やスーパーとの連携

子ども食堂の食材は、地域で取れた島野菜等の差し入れが多い。差し入れ食材を利用生徒に説明する中で、島野菜の関心を広げる機会となり、地域と繋がる機会となっている。また、スーパーや企業から得た賞味期限が迫っている品物を子ども食堂で活用することで、食品ロスの一環に繋がっている。

3. 子ども食堂と食育

学校内子ども食堂は、生徒が食生活の刺激が受けられ、食育においても、気づきが得られ学習の場に有効であることが考えられる。子ども食堂を利用することで、朝食摂取の身体に及ぼす影響が理解され、自分の身体を創る意識が高まった生徒も見られた。さらに意識を高めるための子ども食堂の展開の工夫が重要であると考えられる。

4. 生きる力を育む子ども食堂

学校内子ども食堂は教育環境に繋がる場である。登校を渋る生徒は、子ども食堂の仲間と登校に繋がる機会となると考える。また、子ども食堂ボランティアと教職員との情報共有が可能であり、生徒の教育環境を整えるサポートも可能になると考える。

文部科学省（2017）では、平成29年3月31日に学校教育法施行規則の一部改正と学習指導要領の改訂を行っている。「子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成すること目指した教育」の一環として子ども食堂では、「生きる力を育む」、「地域で子どもの未来を創る」活動が望まれる。そのためには、地域と教育現場とコミュニケーションを充実させることが重要になる。

VII. 今後の課題と展望

学校内家庭科実習室を活用した、子ども食堂発案者である宮里嘉昌先生の思いは、子ども食堂を継続させるこ

とで、生徒へ伝わり生きる力が育まれると考える。伝えていくサポートの一部を担うのがボランティアの役割であると考えられる。

現在のA中学校子ども食堂の課題は、ボランティアスタッフが少ない事である。地域住民への啓発活動を積極的に行っていくことも必要である。地域と学校と協働で、子どもたちの未来を創ることの意識を持つことが重要であると考えられる。子ども食堂の運営は、子ども食堂立ち上げから関わっているNPO法人の2名と筆者が主である。ボランティアを募り、充実させることが早急の課題である。名桜大学では、今年6月に食育支援ボランティアサークルを立ち上げ活動に向けて準備を進めている。

コロナ禍収束後に、利用生徒に逢えることが楽しみである。

引用文献

- 子ども食堂って何？ 一般財団法人 日本educe食育総合研究所（2021年10月9日検索）（educe-shokuiku.jp）
<https://www.educe-shokuiku.jp/category/news>
- 子ども食堂むすびえ（2021年10月9日検索）
https://gooddo.jp/magazine/poverty/children_proverty/children_cafeteria/2225/
- 沖縄県内 子どもの居場所（子ども食堂）一覧【2020年10月1日現在】（2021年10月15日検索）
https://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/kodomomirai/ibasho/documents/00_hyousimokuji.pdf
- 野崎康明（1998）ウエルネスの理論と実際，p12丸善メイツ。
- 前川美紀子（2008）. 大学生による出前講義「食育劇」の取組とそれが及ぼす効果について，名桜大学紀要，第14号
- 前川美紀子（2013）. 食育出前授業の学びとしての“気づきの連鎖効果”に関する事例研究—“食育劇と農業体験”を経験し体験した学生の学びから—，名桜大学紀要，第18号
- 学習指導要領「生きる力」：文部科学省（mext.go.jp）（2021年10月8日検索）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
- 学校運営上の留意事項：文部科学省（mext.go.jp）（2021年10月8日検索）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01514.html

